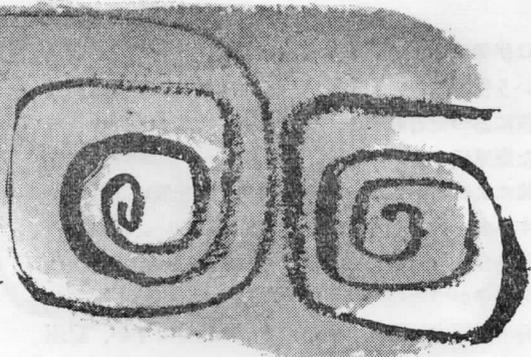


会報 THE ROTARY CLUB OF TSURUOKA



松田美枝さん 絵

第215回例会 1963.9.10 (火) 半晴

例会場 鶴岡市一日市町 ひ さ ご や (707番)
事務所 鶴岡市馬場町十日町口 商工会議所内 (1563番)

Person to Person
Club to Club
District to District

次回例会予定

9月17日 (火) 鶴岡の織物 男網末松君
9月24日 (火) 祭日につき休会

○卓話 やさしい日本史——苗字と家紋
山上八郎氏

○出席報告

本日 会員数 45名 欠 阿部君、早坂君、金井(勝)君
の 出席数 36名 席 今間君、大野君、菅原君
出席 出席率 81.25% 者 谷口君、辻君、吉村君

前回の出席はマークアップ無く修正せず。

○司会 池内会長

○ソング 奉仕の理想 リーダー 広瀬君

○ゲスト 文学博士 山上八郎氏

○ピジター

佐藤吉三君 (酒田R.C)
石井直治郎君 (本荘R.C)
鈴木重吉君 (山形西R.C)

○連絡並びに報告事項

○本日例会後に理事会を開催する
○札幌における地区大会について

1. 大会へ提案する議題があれば各委員会より会長

まで至急御連絡願います。

- 大会でガバナーノミネーの選挙があり、当クラブより2名の選挙人を送ることになって居りますので、幸い斎藤君と石黒君が参加するので両君を選挙人に推薦することにした。
- 地区大会の分担金会員1名につき540円宛8月末日現在の会員数を送金致します。

○ロータリー財団の奨学金についての問合せ状がR・Iより来て居りますので国際奉仕委員会へ付託します。

○宝塚R・Cより希望の家後援会への援助を依頼受けましたので社会奉仕委員会へ付託します。

○卓話 やさしい日本史——苗字と家紋

山上八郎氏

歴史研究で最も身近かなところは自分の生まれた家の歴史をやつて頂くことである。日本の家には何処へ行つても苗字があります。

この苗字の種類は3万以上あるが、何うして出来たかを大別して3つに分類出来ます。その1つは地名が苗字になつたもの、次は官名が苗字になり、もう1つは由緒によるものであります。

最も多いのは地名が苗字になつたもので、例えば武田信玄は甲府韭崎附近の武田が発祥地であり、上杉謙信は越後ではなく丹羽国舞鶴の近所の上杉から出ている。庄内の殿様酒井家は三河の酒井から、酒田の本間家は神奈川県海老名の近く本間から出ているのであります。皆さんの苗字から関係ある地名を調べれば祖先の出どころが察知出来る筈です。

官名に由来する苗字は非常に少なく、先祖が役人をした者であり東北では佐藤、斎藤、武藤などがそれであり藤がついているのは藤原鎌足の子孫である。例えば伊藤

博文は伊勢にいた藤原氏の子孫である。佐藤は左工門之佐という役職についた藤原氏、斎藤は伊勢神宮の齋宮という役にあつた者の子孫、また武藤は武者所という役にあつた藤原氏とされている。

由緒による苗字には鈴木という姓が興味深い。鈴木は東日本に多く、西日本には殆んど見当らない。紀伊の熊野神社は今より千年前には非常に栄え、関東、東北からの信仰が多かつたのであり、その分社を移す際に神官として鈴木、榎本が関東、東北に移つたわけですが、紀州では稲徳をつみ重ねることを方言でスズキといい、これが姓となつたのであります。本席に鈴木さんが居られれば熊野神社へお詣りするときつと御利益があると思ひます。皆さんも自分の苗字に興味を持つて頂きたい。

紋章は現在都市や会社などにも紋があるが90年前は家紋しかなかつたのであります。家紋は800年前に出来たもので大凡3,500位の種類がある。また日本と西洋にあるが支那にはありません。日本の家紋は植物を形どつてあるが、西洋の家紋は動物である。これは民族習慣によるもので、西洋人は動物に縁が深い日本人は住居、食物、衣類など植物に密接な親しみを持つからであろう。

先づ皇室の御紋章は菊と桐であり、近衛家は牡丹、徳川家は葵の紋である。徳川は三河国加茂郡の松平の出身であるが加茂は葵祭で名高い京都の加茂神社と関係が深い。後に群馬県新田の徳川から出たと云つて苗字だけ改め、家紋はそのまゝになつていたのである。仙台の伊達は竹に雀、加賀の前田は梅、前田家は菅公の子孫といわれ、道真の梅を家紋とした。また当地の菅実秀も菅公の末で家紋は梅とのことです。明智光秀は桔梗、斎藤道三は撫子、水野十郎左工門はオモダカ、酒井家はカタバミ(酢漿草)である。那須与市に一丈字、島津は丸に十字であるが大部分の家紋は植物であります。最近自分の家紋を知らない人がいるようですが、苗字と家紋は先祖を知る上に大切なものです。

〇一人一筆 釣 金井国之助

先輩の詩に「一竿海に投ずまた何をか思う」という一句がある。風味ある語と思つている。大海町に居つた古人で「春の日長のしんじょう(鮎並)釣りが何より面白い」と云つた名人があつた。そして煙草を吸いながら今釣れるか今釣れるかと見ている気持は何物にも優る楽しみだと。この2つはいわゆる釣の醍醐味の極致でもあり風雅な趣でもあり、そして私もこのような釣りを楽しんで見たいと思つている。

私は幼時とかく病弱で、小学校に行くまで生きて行けるかと心配された程であつたようだ。それで父は勤めから帰ると、裏の小川に鮎釣りに連れて行つてくれたようだ。そして「暗くなつたから魚も寝たよ」といわれて帰つたということを知りながら聞かされた。これが私の釣りに病つた第一歩であつたでしょう。その後日曜のたびに

秋は枝豆や栗を食べながら加茂磯まで夜道を2、3の友人と歩いたことが楽しかつた思い出となつている。そしてこのような釣りは戦争の頃まで続いた。併しこれは唯釣りたい釣りたいの釣りであつて、心の忙しい釣りであつたと思う。

先年油戸附近に行つた時、丁度波具合もよい所があつたので10尺余の竿で静かに楽しんでいる所に、2人連れの者が来て、私の釣りに邪魔になる程近寄つてくるので「餌さえ撒けばそちらにも魚は行くから邪魔だけはするな」と少し大声で云つたら「あつ金井さんでしたか。似た人とは思つたがあなたが釣りをするとは知らなかつたので……」と云われてよく見れば、昔知つた小学校の校長さん兄弟でした。

近年は釣りも不勉強になり、又右往左往して獲物を争う今の釣り人の間に入つて釣る程の意欲も薄らいでしまつている。近年は保養を目的に、家族の者や、友人と共に行つている。勿論現在の人がやつている釣りをとやかく云う気持はないが、唯自分は自分なりの釣りで楽しみたいのである。昔は大物を競い、量を争つた頃もあつた併し3間余の長竿で2尺余の大鯛を釣つても、1間足らずの小竿で黒子を釣つても釣りの面白さは何も異なるものでないような感を抱いている。又釣りの真の醍醐味はその辺にあるのではないだろうか。

空の雲行きを見、波の模様を眺めて、この岩だと思つて投ずる一竿に遂に何も釣れなくとも、釣りの面白さは変らない。医師がメスを持つた気持も、書家が筆をとる心も亦こんなものではないだろうか。こんなことを考えて見ると、先輩の詩の句も、大海町の古人の言葉も誠に含蓄のある又風雅なもののように感じられるのである。

子供の頃、釣りに行く度に父から、あの岩はどの波の時には行くな。或いはあの岩は北風の時は危険だから行くなと戒められ、若し誤つて海に落ちた時はこのようにせよと教えられ、釣ることはその次に教えられたものであつた。そして漁師はそれで生活する職業だから危険を犯かしても猶をするだろうが、決して危険なことはするなと常に注意されたことを今も思い出している。近年の釣り人の模様を見て寧ろ海に落ちないのが不思議だ位に案じられることがある。併しその人はそれで面白いと思つてやつているだろうから敢て悪いとは云わないが、私は唯魚を釣り上げることから、もう一步前進して釣りそのものを楽しむ心境になりたいものと考えている。

〇幹事報告 会報到着 八戸R.C

〇ニコニコ箱

姪御さんの絵を会報にのせられ 小池繁治君
計画書を新聞に掲載して 中台吉郎君
山上先生より苗字の由来を聞いて 鈴木善作君

〇本日の献立

さしみ(鱸)、焼物(甘鯛味噌漬)、味噌汁(鱸、茗荷)